

In vitro susceptibility of four serotypes of Enterohaemorrhagic *Escherichia coli* to antimicrobial agents

S. Oie, M. Kawakami, A. Kamiya, M. Tomita

Biol. Pharm. Bull., 25 (5), 671 - 673 (2002)

遺伝子型の異なる腸管出血性大腸菌 (血清型 026, 0111, 0157, 0165) 83 株の抗生物質に対する MIC を測定した。

抗生物質の MIC は ciprofloxacin 0.015 - 0.12 μ g/ml, norfloxacin 0.06 - 1 μ g/ml, fosfomycin 2 - 64 μ g/ml (glucose - 6 - phosphate 未添加時), 0.25 - 32 μ g/ml (glucose - 6 - phosphate 添加時), kanamycin 2 - \geq 256 μ g/ml, cefoperazone 0.125 - 2 μ g/ml, ceftazidime 0.06 - 1 μ g/ml であった。

これらのことから, ciprofloxacin, norfloxacin, cefoperazone, ceftazidime に対しては全ての試験菌株が高い感受性を示すことが明らかとなった。

山口県 環境研究所報
第45号 (平成14年度)

中・四国地区における腸管出血性大腸菌感染症の疫学的解析と 分離菌株の細菌学的検討

田中 博, 谷尾 進司, 保科 健, 富田 正章, 中嶋 洋, 榊 美代子, 河本 秀一,
清水 俊夫, 砂原 千寿子, 安岡 富久, 井上 博雄, 渡辺 治雄

感染症学雑誌, 76 (6), 439 - 449 (2002)

1996年から1999年までの4年間に, 中・四国地区の地方衛生研究所が把握した腸管出血性大腸菌感染症の発生状況と, それらの症例から分離された菌株の菌学的特性を調べることにより, 同地区の腸管出血性大腸菌感染症の疫学的解析を行うことができた。

22事例の施設内集団発生事例では, 保育園や老人ホームなどの若・高年齢層の集団に発生する傾向を示し, その血清型は0157のほか026, 0111等によるものであった。これらの施設内発生事例の内4事例では, 日本そ

ば, サラダ, 砂場, 山羊の糞から EHEC を分離することができ, 感染源が特定された。家族内発生例も含めた 898 例の散発例では 24 種類の血清型が認められ, パルスフィールド電気泳動による遺伝子型も多岐にわたっていた。

また, 無症状保菌者が家族内発生例の成人層に多く見られたことから, 感染源として健康保菌者の存在が重視された。分離株の薬剤感受性試験では 924 株のうち 24 % に耐性が認められた。